

2012年度 こひつじ診療所 事業計画

小回りのきく精神科・心療内科中心の診療所として、地域に密着しつつ特色のある福祉医療活動をひき続き実践、展開していく。

1. 児童精神科、発達障がい者にも対応できる精神科、心療内科として診療活動を続けていく。

看護師（常勤1名 非常勤1名）、精神保健福祉士（2名）、臨床心理士（非常勤3名）、教師（非常勤1名）たちと共に、午前8時前より診察を開始し18時前後まで、30分ほどの昼休みを除いて、ほぼ絶えることなく診察に明け暮れている。水曜、金曜日には1日50～70名来院するが、初診診察には60分程度を確保している。発達障がいを含む2～3歳児も含め、子どもの受診が多い（2010年1～12月：6歳未満 22.2% 7～12歳 19.7% 13～15歳 15.2% 16～19歳 7.9%：20歳未満 計 65.0%）。東遠地域に精神科診療所が少なく成人の受診も多い。「まきばの家」「こどもの家」以外でも、母親などから愛着を受けることが困難であったり、虐待を受けてきた子どもたちの診療の要請が増え続けている。福島にて「原発汚染」により非難してきた子どもを3名診察した。今年度も、初診時になるべく丁寧にみて、必要なケースはフォローし、成長を見守っていくように心がけたい。

精神保健指定医として、静岡県中東遠での救急精神医療にて措置診察が必要な患者のために輪番当番にひき続き参加していく。通院患者が時間外や休日に、電話による相談が可能なように、患者にあらかじめ知らせした上で、常に携帯電話で対応できるようにひき続きしていく。

看護師、精神保健福祉士、臨床心理士、教員との連携をひき続き大切にしていく。背後から「まきばの家」のスタッフたちとの協力が得られていること、さらに、豊かな自然環境、動物たち（現在、待合室、診察室の前に羊たちが放牧されている）が備えられていることに感謝しつつ…。2010年5月より、診療所内のデイケア空間を「居場所」として生かし、30年勤め退職した教師に週1日、小中学生のプレイ、個別面談や学習指導をして頂き、個々の子どもたちにより細かく関わることが可能となり、2011年5月から、週2日従事して頂いているが、今年も継続していく。

2. 先のことを見通しながら、「ディアコニア」「まきばの家」「こどもの家」により連携するためのあり方について模索していく。

「こどもの家」「まきばの家」で必要とされる児童の診察、フォローを引き続きおこなっていく。「ディアコニア」の入所者も必要な方の診察を行い、また各施設スタッフの相談にも応じていく。今年度も「まきばの家」の症例検討会（児童相談所の職員なども参加）に、診療所スタッフも可能な限り参加していく。「まきばの家」以外の児童養護施設、自立援助ホーム、乳児院の職員などとの交流も「まきばの家」の職員と共に深めていく。具体的に児童自立支援施設「三方原学園」（浜松市）の子どもたちの診療を続けていく。

3. ひき続き比較的小規模な地域（袋井市とその周辺地域）において、福祉・教育・医療連携の可能性を、特に養護が必要な発達障がいなどの子どもたちを中心に見据えながら模索していく。

袋井市と掛川市の特別支援教育支援チームの委員長を今年度も務めていく予定。

静岡県西部の就学指導委員会と袋井市の就学指導委員会の委員も継続していく。

2010年4月より、袋井特別支援学校磐田分校の精神科医師として校医を勤めているが、ひき続き、袋井特別支援学校の全体に在籍する子どもたちのために教師からの相談にも応じていく。

2007年10月に委員長として提言した、袋井市の早期療育施設の開設について、袋井市がその一歩として並行通園施設「はぐくみ」を2010年5月より開設したが、まだ定期通園を含めた早期療育システムの構築が十分に図られていない。そのために必要な協力を続けていく予定である。

以上